

整理作業でみつけた「なるほど」な情報を、一早くご紹介！

この資料「ここがみどころ、ここがツボ!!」-整理作業の最前線から「蔵出し」最新情報/File.011-

博物館には「収蔵資料整理」とよばれる、資料を世に出すにあたり基礎となり不可欠な作業（点検・ナンバリング・収納・補修など）があります。この作業では、規模の大小はあれ、日々「新（あるいは再）発見」と「感動」と「謎や問いかけ」があり興味が尽きない一方、コツコツと根気強くやるしかない地味で辛く大変な作業です。

ここでは、そんな整理作業の過程で得られた資料にまつわる「なるほど」で「ほほう」な情報をご紹介しますので、皆さんも情報を通じてこの大事な作業の「協働者」になって頂けると幸いです。

というわけで、今回皆さんにご紹介したい新（再）発見資料はコレです！

■資料名 :小宮豊隆氏の日記

■資料のひとことPR:小宮豊隆氏の几帳面な性格と、彼の眼を通じて知るその時代、昭和！

■資料写真 :①小宮豊隆氏の日記
②俳句手帖に書かれた自筆の句

■資料メモ

小宮豊隆資料の中に日記帳があります。昭和31年から38年までは全て同じ旺文社刊行「社会日記」で、厚さ2.5cmの分厚い日記帳を開くと、どの年も1月1日から12月31日まで1日1頁、約500字の几帳面な文字でビッシリ小宮氏の心の内が丁寧に記されています。



写真① 小宮豊隆氏の日記（一部）

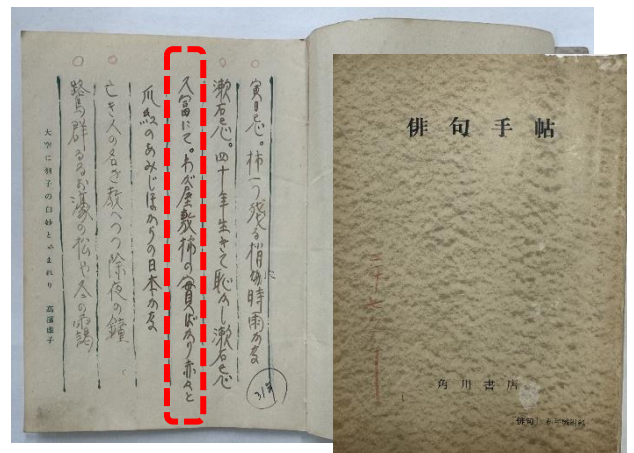
描年譜に記されるような重要な出来事はもちろんですが、些細な日常にどのようなことを考え、憂い、行動していたか、沸き立つ感情の機微までも映し出し、小宮豊隆像を生き生きと想起できる貴重な資料です（写真①）。

昭和31年、小宮氏は母校豊津高校（現育徳館高校）の校歌を作詞するにあたり、一度故郷を訪問することになったと書かれています。同年11月16日には、何十年ぶりに帰郷し「大勢が迎えに出ていたので驚く」小宮氏。豊津高校を訪れ「運動場など昔の傍（おもかげ）がそのままなので懐かしかった」とあり、いろいろなところを見て回り、昔のままのところと変わってしまったところを眺めながら「どうも自分は浦島になったような気がする」と心情を吐露しています。

11月18日には実家のあった犀川の久富を訪れます。「昔の自分のうちに行ってみたら、家も物置もなくなり、便所と風呂場だけが残っていた。屋敷跡は畑になって居り、柿の木だけが残って赤赤と実が日に照っているばかりで、梨の木も柚子の木も杉の木も梅の木も枇杷の木も桃の木も金柑も一つも残っていない」。小宮氏の流れるようなペン運びのその奥には様々な感情が去来したことでしょう。「(久富にて) わが屋敷 柿の實ばかり 赤々と」と俳句手帖（写真②）に書かれたその言葉に、小宮氏の思いが見えるようです。

■整理担当者のつばやき

日記帳を整理しながら小宮氏の姿を垣間見て、また別資料の俳句手帖で句を目にした時、とっさに「ああ、九州に帰った時の句だ!」と感じました。資料の個々はバラバラなものでも、時にその人の人生の中で繋がると、資料に奥行きが生まれます。この瞬間は、パズルのピースが合ったときのように、資料整理ならではの醍醐味です。



写真② 俳句手帖に書かれた小宮豊隆氏自筆の句
右から3列目に故郷久富での思いをあらわした句が書かれている

■資料データ File

- ・形状/材質/法量 旺文社版社会日記/上製本/B6サイズ(18.5×13.6cm)
- ・制作年代 昭和30年代(1956~1963)
- ・注目ポイント 日々丁寧に日記を書く

注) 1. 本文の作成・理解に当たっては以下の資料を参照いたしました。

- ①福岡県立豊津高等学校編「三四郎の森」(錦陵同窓会刊行・昭和60年)②小宮恒子編「逢里雨句集」113ページ(同人刊行・昭和59年)
2. 本文の情報は令和7年1月現在のものです。その後の究明や新資料の発見により見解が改められることもありますので含みおき下さい。
3. 本書に掲載の写真や文章を無断で転載することは禁じられています。

編集・発行：みやこ町歴史民俗博物館/2025